

# 日本サウンドスケープ協会20周年記念展における『福島サウンドスケープ』の展示に対する千葉県立中央博物館の対応をめぐって

●永幡 幸司  
福島大学

## 1 はじめに

日本サウンドスケープ協会（以下、協会）が千葉県立中央博物館において開催する協会20周年記念展『音風景の地平をさぐる』の展示の中に、東日本大震災後のサウンドスケープの変化の様相を記録し、記憶するための協会のプロジェクトである『震災プロジェクト』<sup>1)</sup>の途中経過を紹介する一画がある。そこで展示される内容の1つが、福島第一原子力発電所の爆発事故後の福島市の音環境の変化の記録である『福島サウンドスケープ』<sup>2)</sup>だ。『福島サウンドスケープ』の展示内容は、私が2011年5月1日から福島市内で録音を続け、web上で発信し続けている『[福島サウンドスケープ](#)』の内容の中から、特に、原発事故の市民の生活への影響を考える手がかりとなるであろうと私が考えている地点での記録を選択し、音と写真のスライドショーによる「作品」（DVDによる提示）と「作品」への導入としての録音地点を説明する小文と写真（ポスターによる提示）で構成したものである。この展示部分の担当は、ポスターのアート・ディレクションを除き、私である。

私がこの展示のために書いた地点説明の小文のうち、福島大学（除染の様子）」に係る文章が千葉県立中央博物館の検閲の結果、「館長・副館長等による千葉中央博としての総意」（協会宛に届いた博物館担当者のメールより引用）として、原文のままでは掲載できないこととなった。本稿では、この千葉県立中央博物館の対応の問題点について検討を加えたい。

## 2 ことの経緯

検討をはじめににあたり、まずは、ことの経緯の概要を記述する<sup>3)</sup>。

問題となった原文は、次のとおりである。

福島大学（除染の様子）

福島大学は福島駅から2駅東京方面に上った金谷川駅が最寄りの山の中にある国立大学です。原発事故後2週間程で学長が安全宣言を発表したことが象徴するように、執行部が問題を軽視してきたきらいがあり、若者が集まる場にしては、除染作業が後手に回ったきらいがあることは否めません。

この文章に対し、博物館の担当者からまずは、次の文章による修正依頼が協会の20周年記念展実行委員会に届き、私の下へも転送された。

「執行部が」の部分省略しても、文意が通じると考

えます。趣旨を変更することなく、文字数を減じることも可能ですので、是非、修正をお願いします。<sup>4)</sup>

この依頼に対し、私は協会の実行委員会に対して、以下の返答を行った。

これは、全く趣旨が変わってしまいます。

「執行部が」を省略すると、あたかも大学全体が問題を軽視していたかのように読める表現となってしまいます。しかしながら、実際には、大学構成員全員が、問題を軽視していたわけではなく、むしろ、この問題を重大視していた教員が、ずいぶん頑張ったことによって、ようやく除染が動き始めたという事実があります。この違いは、非常に重要な違いですので、省略することは「意味的に」できません。<sup>5)</sup>

私を知る限り、この返答が協会からの回答として博物館側へと送られている。そして、この返答を受けての博物館側からの最終通告は以下のものであった。

この件について館内で協議しましたところ、福島大学の執行部批判の文章は千葉中央博の展示としてふさわしくなく、共催者としてこのままの文章で展示することはできないとの結論に至りました。

原発事故に関しましては様々な問題があつて、また現在もあることは私も個人的には感じておりますが、このような文章を展示で示すことは共催者である千葉中央博も福島大学の執行部批判をしていると受け取られますことを、どうぞご理解いただきたく存じます。

福島大学執行部批判のくだりは、震災前後の音風景の変化という展示ストーリーに不可欠の内容とは思えず、「原発事故後2週間程で学長が・・・」以下の文章をすべて削除されることをお願いします。<sup>6)</sup>

博物館側から協会にこのメールが届いたのが、記念展の開幕に間に合うようポスターを印刷するためには原稿が印刷業者に届いていなくてはならない期限まで24時間を切ったからのことであつた。

この最終通告への対応として、協会の記念展実行委員会が原文を改変し、博物館側の承認を経た上で、それを印刷業者へと送った。従って、記念展に展示されている『福島サウンドスケープ』は、「作品」としての一貫性が崩れたものとなっていることを指摘しておく。

以上の経過を経て、私がこの文章を書くに至った。

### 3 千葉県立中央博物館の対応の問題点

上で示した一連の流れの中での千葉県立中央博物館の対応における問題点はいくつかあるが、その中で最も重大な問題は、博物館側の思考法のみに基づいた、彼らの「勝手な」<sup>7)</sup>文章解釈により、事実を述べたに過ぎない原文を「批判」文であると断定したことにある。

原文で述べた「執行部が問題を軽視してきたきらいがある」ことが事実であることを示す証拠は、枚挙にいとまがない。例えば、原文でも挙げた「原発事故後2週間程で」学長が発表した「安全宣言」<sup>8)</sup>は、一見、科学的に書かれたかのような装いであるが、その内実は根拠に乏しいどころか明確な科学的な誤りを含んでおり、「安全宣言」としては非常に無責任なものであることは、当該メッセージが大学ホームページに掲載された際に、私のホームページ上で一度指摘し<sup>9)</sup>、さらに、『原発災害とアカデミズム』に寄せた拙文<sup>10)</sup>でも再度論考したとおりである。そのような内容の文章を大学の「組織としてのメッセージ」<sup>11)</sup>として大学公式ホームページに掲載すること自体が、「問題を軽視するきらい」の何よりの証拠であり、科学的な誤りの部分についての訂正すらしないという事実は、その傾向があることを補強する材料に他ならない。文字数の制限がある説明文の中で、「問題を軽視したきらい」の具体的な証拠としてこの事例を選んだのは、このように非常に明確でわかりやすい事例であるからだ。

証拠を重ねれば、展示用のスライドショー<sup>12)</sup>の中で示した、福島大学に来訪したほとんどの車とその前を通過しなくてはならない駐車場を汚染物質の仮置き場として選択した事実や、モニタリング・ポストの周りのような目立つところを中心に除染を行った事実<sup>13)</sup>が、今回の展示内容からも確認できる適例と言えよう。

これでも証拠が足りないと言うのであれば、さらに、事例を足そう。福島大学のホームページに掲載されている「キャンパス内除染に関する取り組み」<sup>14)</sup>を注意深く読めば、学生たちがよく滞留しているサークル棟付近や屋外ステージ周辺（除染時期：2012年8月-9月）より、確かに人が周辺をよく通るものそこに滞留することは少ないモニタリング・ポストの周り（除染時期：2012年2月-3月）の除染を優先していることはすぐに確認できるし、このページとシラバスとを比較すれば、運動場（除染時期：2012年2月-4月）を除染する前から、屋外でスポーツ実技の授業が行われていたことも確認できる<sup>15)</sup>。これらの事実が「問題が軽視されてきたきらい」を示すものであることは、疑いの余地がなからう。

ここで、誤解がないよう一言付け加えておくと、以上の事実を「問題が軽視されてきたきらい」を示す証拠として断定的に述べているのは、私の主観に頼っているわけではない。それぞれの事例に対して、放射線問題に対して相対的により重視した対策があり得る。屋外スポーツ実技を例にとれば、除染作業が終わってから、実技を開講するという選択肢もあり得るのだ。そして、それぞれの事例における選び得る選択肢間の相対的軽重関係は、放射線問題を重大視する人であれ、軽視する人であれ、どのような立場から見ても、変わらない。そのようなあり得る選択肢のなか

から、相対的に問題を軽視した対策を選び取る傾向があるという、立場が変わっても結論が変わることがない事実に基づいているのだ。

これだけの事実を前に、それでも、「執行部が問題を軽視してきたきらいがある」ことが事実ではなく批判であると主張するのであれば、そのように主張するものがその明確な根拠を示す必要がある。しかしながら、残念なことに、博物館側からの回答にはそのような根拠は一切記述されていない。

明確な客観的根拠もなく、自分たちの思考法に依存した見方のみで、事実の記述に対して「批判」だと断定し、言論を弾圧することは、ガリレオ・ガリレイが地動説という事実を唱えた際、キリスト教の教義という自分たちのもの見方に合致しないという理由から、地動説を唱えないよう言論を弾圧する裁定を行ったローマ教皇庁の行為と等しい。そのような言論弾圧を、「千葉県立」という公権力が所在する機関が行っているということが、非常に重大な問題なのだ。公権力が、自分たちの（実は根拠のない）もの見方のみを根拠として、言論の自由、表現の自由を奪っていることに他ならないからだ。さらに、博物館という自然科学に係る展示をも行う教育機関が、ガリレオに対する教皇庁の弾圧と同様の構図で言論弾圧を行っていることは、非常に嘆かわしいことであることも、忘れずに付記しておこう。

以上で述べたことよりは相対的には軽いかもしれないが、少なくとも私にとっては無視できない重要な問題として、博物館側の「作品」の扱いに対する不適切さを挙げることもできる。

このことを説明するにあたり、前準備として、サウンドスケープの定義を掲げておきたい。サウンドスケープは「個人あるいはある社会にどのように知覚され、理解されているのかに強調点の置かれた音の環境（音環境）。それゆえ、サウンドスケープは個人と音の環境との間の関係によって決まる」と定義されている。この定義からわかるように、サウンドスケープが語られる際には、単にその場にある音の環境の物理的側面のみが問題となるのではなく、それを聴く人の置かれたコンテキストが非常に重要なのだ。

福島の音環境の変化を〈他ならぬ私〉が記録し、〈他ならぬ私〉が選択し、〈他ならぬ私〉が編集することで構成した展示内容の世界は、福島の現状を反映した世界であることはもちろんのことであるが、私が作り上げた世界であることから逃れることができない、私と福島との間の関係によって決まった福島のサウンドスケープなのだ。私が本稿の冒頭から、今回の展示物について「作品」という言葉を用いて表現してきたのは、このような意味においてである。つまり、作者である私がひとまとまりのものとして提示したサウンドスケープは、それが一揃い揃ってこそはじめて成立するサウンドスケープなのだ。『福島サウンドスケープ』が「福島の音環境」や「福島の音」ではなく、『福島サウンドスケープ』を名乗っているのは、正に、このためだ。その世界の一部に、外部から何か改変が加えられれば、その世界の一貫性は崩壊する。

上述のとおり、博物館側は「福島大学執行部批判のくだりは、震災前後の音風景の変化という展示ストーリーに不

可欠の内容とは思えず」と断定している。この断定は、「批判」ではなくあくまでも「事実」の記述であるという点で事実誤認をしていることは既に述べたとおりだが、誤りはそれだけではない。この「事実」の記述は、スライドショーの中で示した、福島大学に來訪したほとんどの車がその前を通過しなくてはならない駐車場を汚染物質の仮置き場として選択した事実や、モニタリング・ポストの周りのような目立つところを中心に除染を行った事実という、考えようによれば非常に不思議な放射線対策がなぜ行われたのかということを考えるための手がかりとなっており、「ストーリーに不可欠の内容ではない」という点においても誤っている。だいたいにおいて、いくら私であっても、理由もなくわざわざ自分が務める大学が行った、世間から非難される可能性がある行為を、積極的に世に広めるようなまねはしない。

「考えようによれば非常に不思議な放射線対策」などと書くと、結局は「作品」の鑑賞者に、そのような選択をした執行部を批判させようという意図なのではないかと邪推する人がいるかもしれない。しかし、これに対して結論から言えば、否だ。もちろん、私自身がそのような対策の実施のあり方に否定的であることを否定はしない。しかし、他者に対し、私が考えているのと同じように考えるよう強要する気は殊更ない。さらには、例えばこの「作品」を視聴し、「問題を軽視している執行部のおかげで、この程度の除染で良しとなったことは極めてめでたいことだ。もし、執行部が神経質で、徹底的な除染をしまくっていたら、福島の住民の不安は一層強まっていたかもしれない」と感想を持つ者がいたとしても、そのこと自体を咎めたり、否定したりする気も毛頭ない。なぜなら、それこそが、その者に立ち現われた福島のサウンドスケープだからだ。自分と異なる立ち現われ方をしたサウンドスケープを否定することは、人が多様であることを否定することに他ならない。これはサウンドスケープの根底にある考え方を否定することであり、さらには、民主主義の根底を覆すことでもあろう。

相異なるサウンドスケープが立ち現われているもの同士が出会った際、そこですべきことは、サウンドスケープをめぐる対話を通してお互いの違いをまず受け入れ、お互いに満足できる、よりよい音環境の将来像、さらにはよりよい社会のあり方を共に構想し、それらの実現に向けてそれぞれが何ができるかを考えることである。これこそが、私が信じる「世界の調律」<sup>16)</sup>の神髄だ。原発事故後の福島のサウンドスケープについて言えば、放射能汚染問題の現状に対する考え方の違いを超えて、今後の福島の、さらには日本のあるべき姿を、サウンドスケープという観点からの対話を入口として共に考え、よりよい共有された将来像を構築することこそが必要だと考える。それがゆえ、私は『福島サウンドスケープ』という「作品」を制作し続けているのである。

それに対して、博物館側の態度は、自分たちが展示のストーリーをそもそも理解できていないにも関わらず、作者の意図を理解しようとする問いかけの1つもせず、一方的に、自分たちの保身に都合の悪い文章を、都合のよい文章へと差し替えるよう通告してきたのである。これは、作者

と「作品」に対する冒涇に他ならない。そして、そのように文章を差し替えることで出来上がった一貫性の崩壊した「作品」を、何の臆面もなく展示するということは厚顔無恥であることこの上ない。

## 4 おわりに

以上で論じたとおり、日本サウンドスケープ 20 周年記念展における「福島サウンドスケープ」の展示に対する千葉県立中央博物館の対応は、公権力の乱用による言論の自由と表現の自由の侵害であり、さらには、作者と「作品」に対する冒涇行為である。これらの問題のうち、特に、言論の自由と表現の自由の侵害については、決して見過ごすわけにはいかない。

そこで、私はこれらの問題に対する抗議として、この文章を執筆し、これを私のホームページ上で公開することとした。さらに、私には、言論の自由と表現の自由が保障されない空間において言葉を発することは、一言論者として決してできない。そのため、千葉県立中央博物館がその非を公式に認め、適切な形での対応がなされない限り、既にホームページ上などで私が登壇することが公表されているものも含めて、全ての千葉県立中央博物館における行事に参加することを拒否することをここに表明する。

## 註

- 1) 日本サウンドスケープ協会震災プロジェクトの詳細は、同プロジェクトホームページを参照いただきたい。  
URL: <http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~nagahata/saj-311/>
- 2) 福島第一原子力発電所爆発事故後の福島市の音環境の変化の様子を記録するため、永幡により 2011 年 5 月 1 日から開始されたプロジェクトが「福島サウンドスケーププロジェクト」であり、このプロジェクトの記録をホームページを始め、様々な形で発信する際のタイトルが『福島サウンドスケープ』である。このあたりの経緯は、参考文献 [1],[2]を参照いただきたい。『福島サウンドスケープ』のホームページでは、協会 20 周年記念展で公開している以外の数多くの記録を公開している。こちらも閲覧いただきたい。  
URL: [http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~nagahata/fsp\\_311/](http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~nagahata/fsp_311/)
- 3) 本稿に書いた経緯は、私の立場で把握できている範囲のものに限られていることを、まず、ここに明記しておく。その上で一言付け加えれば、私が把握できていない本件に係る重要事項があったとすれば、それだけ、今回の展示に係る関係者間の対話がなかったということを示す証拠ということになる。
- 4) 記念展実行委員会から私に転送された、協会宛に届いた博物館担当者のメールより、句読点まで含め、そのまま引用した。
- 5) 私が記念展実行委員会に送付したメールより、そのまま引用した。
- 6) 記念展実行委員会から私に転送された、協会宛に届いた博物館担当者のメールより、句読点まで含め、そのまま引用した。
- 7) ここで「勝手な」を括弧で括ったのは、この語を、私

自身の思考法に基づいた主観的な評価により選択したことを、私自身が明確に意識して使っていることを明示するためである。

8) この安全宣言は、福島大学ホームページ上からは既に削除されてしまったようであるが、参考文献[3]に資料として記録されている。

9) <http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~nagahata/archives/20110325.html>

10) 永幡幸司：なぜ、サウンドスケープ研究者の私が放射線汚染問題に対して発言を続けるのか、参考文献[3]に収録。

11) 福島大学長より私宛に送られたメールより引用した。

12) ホームページ版『[福島サウンドスケープ](#)』にて、[ほぼ同内容のスライドショー](#)（ただし低解像度）の閲覧が可能である。

13) この一件については、日本騒音制御工学会の学会誌である『騒音制御』のコラムでも紹介している。このコラムは、<http://www.ince-j.or.jp/03/page/pdf/36-6.pdf> で閲覧可能である。

14) URL: <http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/top/torikumijosen.html>

15) 本稿を執筆するにあたり、シラバス上だけでなく、実際に開講されたことを教務課に確認済みであることを、一応付記しておく。

16) 「世界の調律」は、サウンドスケープ概念を提唱したマリー・シェーファーの主著のタイトルであることを、サウンドスケープに明るくない人のために一言添えておく。

## 参考文献

[1] 永幡幸司，“東日本大震災の音風景をめぐって”，サウンドスケープ, 13, 13-18, (2012).

[2] 永幡幸司，“福島サウンドスケーププロジェクト”，サウンドスケープ, 14, 15-16, (2013).

[3] 福島大学原発災害支援フォーラム・東京大学原発災害支援フォーラム編：『原発災害とアカデミズム』, (合同出版, 東京, 2013).